

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 3号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成二十四年三月
第三号

< 2012年3月 >

古賀 順子

「東日本大震災」

東日本大震災の日、私は南仏地中海に面したカンヌから40km南西に位置するフレジュスにいました。ジャン・コクトーの内装で知られるノートルダム・ド・エルサレム礼拝堂を見るためです。1961年着工され、63年コクトーが亡くなると、エドアール・デルミット（映画「恐るべき子供たち」でポール役を演じた美青年、絵の才能もあるコクトーの法的受遺者）が引継ぎ、65年完成した小さな八角形の南仏らしい礼拝堂です。小春日和の柔らかい太陽が溢れ、すれ違う人もいない砂利道を昇りながら「飛んでもないことが起こってしまった」という思いで一杯でした。

二日後パリに戻ってからは、仕事以外は家にこもり、TF1・2・3、24時間ニュース番組BFMTVなどのテレビにかじりついていました。映画のようにじわじわと押し寄せる津波、福島第一原発の爆発を繰り返し見ているうちに食欲はなくなり、胸が押しつぶされるようでした。地震、津波、そして原発事故とあまりの事の重大さに、一体何ができるのかと呆然とするばかりでした。被災地への思いはあってもそれをどう伝えたらよいのか、多くの人が無力感に苛まれました。パリでもオペラ座やシャンゼリゼ劇場など、主な文化会場で日本支援のコンサートやイベントが行なわれました。パリ在住の作曲家上林裕子さんとその友人でピアニストのジャン＝マルク・ルイサダさん

の呼びかけに応じて集まった100人を超えるアーティストによるサル・ガヴォー・ホールでのチャリティー・コンサート、私も裏方として参加しました。日本人、フランス人を問わず、だれもが何かせずにはられない日本への強い思いがあったからです。

あの惨事から1年。パリに限っても、大小数々の催しが予定されています。エッフェル塔に近いパリ日本文化会館では震災に関する講演会や写真展。指揮者の佐渡裕氏は日本からスーパーキッズ・オーケストラを率いて、ノートルダム寺院とパリ・ユネスコで鎮魂と復興の願いを込めたコンサート。パリ在住邦人を代表する高田賢三氏は、パリ16区シャイヨ宮広場で追悼の集いを主催されます。皆が自分の分野でできる支援を長く継続していこうと願っています。と同時に、だれもが原発事故の不安から逃れられないことを感じています。

福島原発の事故処理はスタートしたばかりで、発電所の解体だけでも最低40年は必要だとフランスでは報道しています。3月11日の惨事はこの先何世代にも渡り、日本の子供たちにたいへんな重荷を背負わせてしまいました。日本人は広島、長崎、そして福島の皮肉な惨事を共有し、伝えていかなければならないと思います。個人にできることには限りがありますが、自分にできることを考え、大切に思う人の力になりたい、東京や首都圏に暮す家族や友人たちがこれから何を食べて、どのような環境で生活していくのか、生涯を通じて共に監視し、考えていくことが私の3.11支援です。